

少雨による農業用ダムの貯水率低下に伴う 各品目への影響と節水対策について（８～９月）

令和８年８月２６日

宮崎県総合農業試験場
専門技術センター

連日の暑さと雨不足で一部の農業用ダムの貯水率が下がっており、今後の水管理を心配されている方も多いかと思います。しかし、限られた水を有効に活用することで被害を回避することは十分に可能です。

本資料は、被害を未然に防ぎ、作物や家畜のストレスを軽減するための具体的な対策をまとめたものです。早めの対策と丁寧な観察でこの乾きを乗り越え、実り豊かな秋を迎えましょう。

困りごとや不安な点は、地域の農業改良普及センター等にご相談ください。

【全般】

(1) 予想される被害状況

- ① 作物・飼料作物の生育不良及び着果肥大不良、肥料分の肥効低下に伴う生理障害の発生
- ② 土壤水分不足による畝立て等作業の遅れ
- ③ ハダニやウンカ等の害虫及びいもち病、うどんこ病等の病害の増加
- ④ 畜舎等の洗浄水不足による衛生環境悪化や、屋根散水等の暑熱対策の中止による家畜の暑熱ストレスの増加
- ⑤ 家畜が飲水で利用している場合、採食量の低下と増体や繁殖成績等の生産性の悪化

(2) 対策

- ① 土壤水分の蒸発抑制
：株元へのマルチング（白黒ダブルマルチや敷きわら・敷き草等）を実施する。
- ② 代替水源の活用
：育苗中の苗へのかん水や家畜の飲水・洗浄など節水を行うことが困難な場合は、水道水や井戸水等を活用する。

※ 長く使用していない井戸水を使用する場合は、ECが高くなっていることがあるので事前に水質を確認する（特に海に近い地域は海水の混入に注意）。

※ 水源（河川やため池）を使用する場合は、水利権等の問題で勝手に水をくみ上げることができない場合もあるので、事前に最寄りの市町村で施設管理者の確認をすること。

※ また、これらの水源を使用する場合は、苗立枯病などの病原菌の侵入リスクが高まる可能性があるため、必要に応じて防除を実施する。

※ 畑かん水を活用する場合においても、貯水率の低下で濁りが起きることがあるので、定期的にフィルターの詰まりがないか確認する。

③ 病虫害防除の徹底

：乾燥や草勢の低下等より病虫害が増えることがあるので、遅れないように防除する。

④ 渇水解消後のかん水再開時の注意点

：土壌の乾燥状態が続いた土壌に急に大量のかん水を行うと、作物に影響が出るがあるので、下記の点に注意する。

- ・ 極端に土壌が乾燥すると一時的に水を弾く性質になり、かん水を行っても奥まで染み込みにくく表面だけがぬかるんでしまうことがある。
そのため、最初は土の表面を湿らせる程度の少量の水を与え、土壌に水が染み込みやすい状態にし、その後1時間ほどあけてから2回目、3回目と徐々に水の量を増やしながら数回に分けてじっくり染み込ませる。
- ・ 作物が急に吸水すると、水稻ではいもち病の発生を助長するなど多肥による障害や果実や茎の急激な肥大による裂開で細菌病等の感染がおきやすくなる可能性があるため、よく作物を観察し必要に応じて防除を行う。
- ・ 炎天下にかん水を行うと、水滴がレンズの役割をして葉焼けを起こしたり、温まった水で根が障害を受けたりする可能性があるため、早朝や夕方時間帯に行う。

【普通作物】

＜普通期水稻＞（出穂期～成熟期）

(1) 予想される被害状況

- ① 不稔や登熟不良の発生による品質低下や減収
- ② ウンカ、紋枯病、いもち病等の多発

(2) 対策

- ① 渇水が解消し、急に湛水すると青立ちが発生する場合があるので、間断かん水で管理し徐々に湛水に慣らす。
- ② 成熟期に達した稲は、速やかに収穫する。
- ③ ウンカ、紋枯病、いもち病の発生に注意し遅れないように防除する。

＜大豆＞（開花期～莢肥大期）

(1) 予想される被害状況

- ① 生育や開花や着莢の不良、莢の肥大の遅れ
- ② ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫の多発

(2) 対策

- ① カメムシ類やハスモンヨトウ等のチョウ目害虫の発生に注意し、遅れないように防除する。

【茶】

(1) 予想される被害状況

- ① 秋冬番茶の収量・製茶品質の低下
- ② 新芽の生育遅延
- ③ 翌年の新茶への影響

(2) 対策

- ① 新改植茶園や幼木園では、株元への土寄せや敷き草等を行い乾燥を防止する。

【果樹】

<露地果樹全般>

(1) 予想される被害状況

- ① 土壤水分低下による追肥の肥効低下に伴う生育不良
- ② 果実肥大の低下
- ③ ハダニの増加

(2) 対策

- ① 土壤表面の乾燥防止のため、草刈り、敷き草を行い、土壤水分の蒸発を抑える。
- ② かん水用の井戸がある場合は、事前に点検していつでもかん水できるようにしておく。
- ③ タンクに貯めた水を動力噴霧器でかん水を行う場合は、土中にかん水ノズルを差し込んで直接根域にかん水する。

※特に温州みかんでは成熟期が近づいており、かん水による急激な土壤水分の変化は、裂果を引き起こすことがあるので、少量ずつのかん水を数回に分けて実施する。

- ④ ハダニ類の発生動向に注意し、早めの防除を実施する。

【野菜・花き類】

＜施設野菜・花き全般＞

(1) 予想される被害状況

- ① 水分や肥料の吸収量減少による、生育遅延や病害の多発
- ② 土壌水分不足による畝立て作業などの遅れ

(2) 対策

- ① 育苗中の場合は、渇水が解消されるまでの間、井戸水や水道水を活用してかん水する。
- ② 水源（河川やため池）を使用する場合は、水利権等の問題で勝手に水をくみ上げることができない場合もあるので、事前に最寄りの市町村で施設管理者の確認をすること。
- ③ 高温による乾燥を軽減するため、必要に応じて遮光ネット等を用いて遮光を行う。
- ④ 作付け前のは場において、完全に土壌が乾燥してしまうと水が浸透しにくくなり、植付け後の作物の生育不良を招く可能性がある。その場合、定植前に大量の水が必要となってしまうため、完全に乾燥する前に少量で時間をかけてかん水を行う。

※【全般】の「渇水解消後のかん水再開時の注意点」を参照。

＜雨よけ栽培＞

(1) 予想される被害状況

- ① 乾燥による生育遅延や生理障害の多発
- ② 花芽の形成阻害、果実の肥大不良、トマト、ピーマンの尻腐れ果の発生
- ③ ハダニの発生やうどんこ病の多発

(2) 対策

- ① ハウス内の温度上昇を防ぐため、日中の光線の強い時間帯に遮光率30～50パーセントの資材を用い遮光を行う。
- ② 白黒ダブルマルチや敷きわらを厚く敷くなどして、地温の抑制と土壌水分維持に努める。
- ③ 肥料の吸収阻害による生理障害に対しては、必要に応じて石灰や微量元素を含む葉面散布剤等を施用する。
- ④ アブラムシ、ハダニ、うどんこ病等の多発が予想されるため、発生初期から薬剤散布を徹底する。

＜露地野菜全般＞

(1) 予想される被害状況

- ① 播種前の品目（だいこん、ほうれんそう等）：土壌の乾燥による畝立て作業等の遅れ
- ② 播種期・定植期の品目（にんじん）：発芽不良、活着不良の発生
- ③ 生育期の品目（中生さといも等）：地上部の枯死や過乾燥による生理障害の発生

(2) 対策

- ① 播種前～播種期の品目については、降雨を待つて畝立て・播種を行う。
- ② マルチングができる品目については、地温の上昇しにくい敷き藁や白黒マルチ等により降雨後速やかに行う。
- ③ 移植栽培を行う品目については、栽培植穴にかん水してから植付けを行う。

＜さといも＞

(1) 予想される被害状況

- ① 乾燥による茎葉の枯死、生育の遅延
- ② 水晶芋や芽つぶれなどの生理障害の多発
- ③ かん水再開や降雨等による生育回復後の二次肥大による品質低下

(2) 対策

- ① 水晶芋や芽つぶれが起きやすい石川早生等の品種については、早めに収穫する。

＜にんじん＞

(1) 予想される被害状況

- ① 播種後の発芽不良

(2) 対策

- ① 降雨を待つて播種を行う。
播種については、地域差もあるが9月20日頃まで可能。

【畜産全般】

(1) 予想される被害状況

- ① 畜舎等の洗浄水の不足による衛生環境の悪化
- ② 屋根散水等の暑熱対策の中止による暑熱ストレスの増加
- ③ 飲水で利用している場合、採食量の低下、それに伴う増体や繁殖成績等の生産性の悪化

(2) 対策

- ① こまめな家畜ふん尿の搬出を心がけ、洗浄水の利用は、防疫上重要な箇所の優先した実施による節水に努める。
- ② 換気・送風を強化し、畜舎温度の急激な上昇を防ぐとともに、飼育密度を適正に保ち暑熱ストレスを軽減する。また、涼しい時間帯の給餌や冷水の給与などにより、摂食量が落ちないように工夫する。
- ③ 飲用水は、水道水や井戸水の利用を検討し、最低限の引水量を給水タンク等に確保する。
なお、井戸水を利用する際は、衛生面を考慮し、消毒して利用する。